

色は具体的なモノです。



ホルベインの油絵具は、優美で透明感のある色みが特徴です。その発色には、光沢、こし、粘りなど、絵具自体の物性の影響も大きい。そしてそれは、絵具づくりに最も重要な「練肉」で決まります。練肉は機械を使って行われますが、場合を見計らうには熟練と経験を必要とし、納得のいくまで練肉を繰り返し、完璧な色をめざします。色は具体的なモノ、だからマニュアルどおりにはいきません。ホルベイン絵具の命は品質です。

●油絵具20号(110 ml)チューブ、40色新登場。大きいサイズでも、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3566)9251 大阪府東淀川区上小島1-3-29 TEL.06(6722)1514



holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

## 丸山直文

鷹見明彦 文 森田ケン 写真・印

ステイン 予兆でもある記憶の光彩



1989年、ファッションとビジネスに憧れて東京にきたはずが、ビル掃除をしながらBゼミに通っていた。現代美術の要諦にふれる講義と演習にコンセプトチュアル、そして絵画へと向かっていった



1988

「アパートの窓から見える空……。」

矩形を前提にするモダニズム絵画を学びながら、閉塞感から出たいという気持ちが募っていきました」

sky-kitami A 1988 綿キャンバスに  
アクリル 130.5 x 97.5cm

径や河川のラインがゆたかな線でドウローイングされた手書きの地図をたどって、訪ねたアトリエは、多摩丘陵が織りなす谷合いにあった。周囲には、新緑の山林と田畑が広がっている。緑の屋根のトタン家屋二階のスペースは、十五年ほど前にBゼミの友人と共同で借りて以来、使いつづけている。ここ数年は、海外での発表が多かった丸山だが、今秋東京で開かれる予定の個展と森美術館の開館記念展にむけての大作の制作が進行していた。

九〇年代とともに現れた丸山直文の登場は、絵画不振の時期を脱ける新世代ペインティングのシンデレラ・ボーイという評価に迎えられて、鮮明だった。十年経つても変わらない少年の貌のペインターは、はじめから画家をめざしたわけではなかった。新潟で高校を卒業後、地元のスーパーマーケットに就職した丸山は、そのころ流行っていたDCブランドやファッション業界に

# 1992

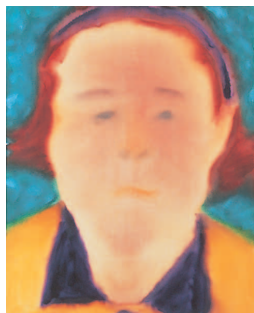
「なぜステインング 滲み なのかと  
いえば、手癖の痕跡や絵の具の  
物質性を排除したかったから。  
描く作業と消えていく  
現象が同時にあって  
それぞれの力がお互いを  
打ち消しあうところに  
止揚の場が生まれるんです」



上—SWR 1992 綿布にアクリル 230×230cm  
下—sachi- 1996 綿布にアクリル 162.0×130.3cm

関心をよせて、上京して文化服装学院に入学した。「デザイナーよりもショップに興味があったので、ビジネス・コースを選んだんです」。実習でデザイン画を描くうちに、絵のほつが面白くなって、イラストやグラフィックが盛んなセツ・モード・セミナーへも行った。

「学校の本棚にイラストレーター  
の河原淳さんの本があって、弟は  
世界一の風景画家だ」と書いてあり  
ました。その弟、河原温の作品は、  
行った場所の歩いた道を地図上に  
赤鉛筆でなぞっていた。まわりが騒  
いでいたバルコのグラフィック展よ  
りも、西武美術館の「もの派とポス  
トもの派の展開」展（一九八七）など  
を観たりするうちに、現代美術と  
いう表現の世界があることに目覚  
めていった。ビル掃除のアルバイ  
ト先で知り合った友人が、Bゼミと  
いう現代美術の学校に行っていた  
のが縁で、その受講生になった。当  
時のBゼミは、岡崎乾二郎や中村  
一美たちがモダニズムの方法論と  
実践の教化に努めて、日本の美大



に欠落した先進性を開く場となっ  
ていた。とくに九〇年代の初めに  
かけては、中村の影響を受けてフオ  
ーマリズムを踏まえた一群の新人  
ペインターが育った。レイ・メイ  
ドの椅子やベンチを持ち込んで概  
念的な作品を試していた丸山も、  
次第に絵画に形式をしほって取り  
組むようになった。『絵が好きだっ  
たら、絵を裏切れ』という中村さん  
のことは、いまでも憶えていま  
す。

『SWR』(一九九二)は、Bゼミ修  
了後にアシスタントに採用してく  
れた彦坂尚嘉の紹介で開いたふた  
つの個展で、一躍注目を浴びたこ  
ろのシリーズの一作。たつぷりと  
水に浸した口ウ・キャンバスにアク



big rock 2003(未完成) 綿布にアクリル  
259.0×183.5cm  
撮影=中川達彦

アトリエの壁には、たくさんの緻密な  
エスキースが\*



## 2003

「以前の絵は、一発勝負でした。  
いまは薄い色から重ねていくので時間がかかります。  
ステインは、直しが利きません」

九〇年代の前半は、新世代の絵画のホープとして、美術館をはじめとする企画展への出品が相ついでには、大いに共感もした。

フォー・キャンパス、ステイン……、フォー・マリズムによる抽象表現主義の分析からモダンニズム絵画の構造を学びながら、矩形やフレームを前提に形象を問題にしたりすることに、閉塞感があった。「広告写真やプリント柄の部分を用いるのも、美術を外部に社会につなげたい切迫感があるからです」。そのころ知ったロス・ブレックナーやテリー・ウィンターズ、そしてピーター・ハリ、ターフといったネオ・ジオなどのアメリカの新しい画家たちには、大いに共感もした。

リル絵の具を滲ませるステインングの手法で、細胞や植物の組織を拡大したような形象が瑞々しく浮かび上がっている。「ロウ・キャンパスといつても、すぐにキャンパスは使ってしまうから裏にも描き出したし、綿布は、文化服装学院のときの立体裁断用の布があまっていたので、木枠に張って使ったんです」。





**まるやま・なおふみ** 1964年新潟県生まれ。文化服装学院、セツ・モードセミナーを経て、90年Bゼミスクール修了。90年青山ギャラリーで初個展、91年INAXギャラリー、村松画廊、94、95年佐谷画廊、2001年ブルス&オックスギャラリー(ベルリン) 02年トーマス・エンペギャラリー(NY)などで個展。グループ展では92年「形象のはざまに」(東洋国立近代美術館、国立国際美術館)、95年「視ることのアレゴリー」(セゾン美術館)、99年「MOTアニュアル1999 ひそやかなラディカリズム」(東京都現代美術館)、2000年「コンチネタル・シュフト(大陸の筆跡)」展(ルードヴィヒ・フォルクム・アーヘン[独])、02-03年台北ビエンナーレ(台湾ほか)。今秋、9月上旬にSHUGOARTSで個展、10月18日からはじまる森美術館オープニング展覧会「ハビネス」今を生きるために」に出品予定。

初期の作品を描いたのも同じこのアトリエ。9月、東京での3年ぶりの個展と、秋の森美術館開館展に向かって、大作の制作に励む\*

だ。それをこなしながら、同じスタイルを反復して評価を確立していく誘惑と偽装を解きたい欲求に分裂する自分がいた。九六年の個展で、プライベートな知人たちのポートレイトを画面いっぱい描いたのは、その状態を全面的に打開するための端緒だった。

「予兆でもありえるような記憶：…、現在につながりながら現在に囚われない世界の記憶と拡がりにもすはれる虚構の空間として、絵はある」。その想いは、それから二年間のベルリンでの研修期間に描かれた夏のひかりと緑に溢れた公園や郊外で見かけた子供たちのスナップ

によるシリーズとなっていた。

《big rock》(二〇〇三)は、秋の個展に出品予定の新作。岩山の崖上に子供を点景として配する図柄は、これまで何度か描かれている。水に飛び込もうとしている少女の絵などとともに、光彩にみちた世界の直なかの通過儀礼の瞬間を描いて、深層心理を映すと解釈するのは容易だろう。アトリエの壁に張られた入念なエスキースは、画家が写真や童話などからのイメージをモニター・ジュして、構図や配色を練り上げた工程を物語っている。観るほどにナチュラルに波動するフォーカスと色彩の響きに具象/抽象という分節が融けて、図像の内から曖昧でありうる絵の身体が耀き出してくる……。

丘陵をわたる風に吹かれて遠ざかる背後には、また永遠の戯れにも似た行為をつづけに小屋へ戻る不老の少年がいた。

たかみあきひら美術評論家